# 日本語動詞の語彙的アスペクトと意味表示
## ―「しよる」「しとる」の用法に基づく考察―

**Lexical Aspect of Japanese Verbs and Semantic Representation: Semantics of *siyoru* and *sitoru***

成城大学社会イノベーション学部教授
磯野達也 ISONO, Tatsuya

## 1　はじめに

宇和島方言を対象とした工藤（1995）の研究をはじめとする西日本方言の研究で，「しよる」「しとる」の用法とそれに類似した表現，これらを含む表現についての観察と分析が多く行われてきた。これらの研究での観察は大まかに次のようにまとめられる[1)]。

（1）a. 過程（動作継続過程，変化継続過程）
　　妹がケーキ作りよる／作っとる。
　b. 直前（動作開始直前，変化開始直前）
　　机から財布が落ちよる。（財布が落ちそうなのを見て）
　c. 結果（主体の必然的結果，客体の必然的結果）
　　妹がケーキ作っとる。（テーブルの上のケーキを見て）
　　財布が落ちとる。（財布が床の上に落ちているのを見て）
　d. 痕跡（偶然的結果）
　　おじいちゃんがお酒飲んどる。（酔っ払ったおじいさんを見て）
　　子どもたちが田んぼを歩いとる。（田んぼの足跡を見て）
　e. 経験記録（以前の動作の効力）
　　あんたはさっきジュース飲んどる。もうやめなさい。
　　あの人，小さいときにアメリカ行っとる。
　f. 反復（反復習慣）
　　お父さんは毎日お酒飲みよる／飲んどる。
　　あんたは小さいときよくおもちゃ壊しよった／壊しとった。

磯野（2018）では，岡山県北部の津山方言の「しよる」「しとる」の用法を観察し，大筋で工藤（1995）で報告されている用法と一致していることを確認した。

「しよる」は動作や変化の継続を表すのが基本で，動作や変化の開始限界の前も表すと考えられる。また，「継続」を表すことから，反復習慣の用法が派生したと説明される。「しとる」は結果状態を表すのが基本であり，これは動作や変化の終了限界後の状態を表すということである。限界後を表すということから，動作や変化の開始限界後も表すことになり「継続」を表すと分析される。また，状態を表すことから，反復習慣も表すと考えられる。

本稿では，先行研究の分析と筆者による西日本での調査に基づいて，動詞の意味表示と「しよる」「しとる」の意味表示の関係を明らかにすることを目的とする。第 2 節で，「しよる」「しとる」の用法の概略をまとめ，動詞の概略的な意味表示を

確認する。第3節では「しよる」の用法と動詞の意味表示を考察する。「直前」用法の場合を中心に議論し，提案した意味表示で「過程」用法の解釈も捉えられることを示す。第4節では「しとる」の意味解釈と動詞の意味表示の関係を議論する。第5節で「しよる」「しとる」と動詞の意味表示の関係をまとめ，併せて英語の進行形の意味表示についても示唆を行う。第6節で議論をまとめる。

## 2 「しよる」「しとる」の用法の概略

磯野（2018）では，それまでの先行研究での報告や分析を確認した上で，下にあるような工藤（1995）で報告されていない細かい観察を報告した。

（2）a.「過程」の用法については，主体動作動詞（非限界的）の場合,「しよる」と「しとる」を含んだ表現の意味には差が見られない。
b. 主体動作主体変化動詞，主体動作客体変化動詞の「しとる」は,「過程」と「結果」の解釈が可能で曖昧である。
c. 心理動詞では, 主語が一人称の場合は「しよる」は容認されないが，三人称の場合は,「しよる」「しとる」ともに容認される。
d. 可能形の動詞の場合は，基本的に「しよる」「しとる」ともに容認されるようである。「しよる」は瞬時的な現象を表す場合には容認されにくいと思われる。

いわゆる「過程」を表す用法については，次の3種類の動詞タイプが「しよる」「しとる」と組み合わされることで表現され，主体動作動詞（非限界的）の場合,「しよる」「しとる」の表す意味の差については，話者たちは差を明確には感じていないようである。これに対して,「しとる」は, 主体動作主体変化動詞, 主体動作客体変化動詞は,「結果」も表すので,「過程」と「結果」のどちらを表すか曖昧となることを津山方言で確認した。

主体動作動詞
（3）a. 友達を待ちよる。
b. 友達を待っとる。
主体動作主体変化動詞
（4）a. 出口から出よる。
b. 出口から出とる。
主体動作客体変化動詞
（5）a. シートベルトをはずしよる。
b. シートベルトをはずしとる。

磯野（2018）では, こうした「しよる」「しとる」の動詞との組み合わせによる用法について，動詞の意味表示をもとに概略的な説明を試みた。語彙意味論における分析では，動詞が表す事象は次のように「行為・活動」「移動・変化」「状態」のいずれか，あるいはこれらのまとまりであると考えられている。

（6）動詞が表す事象（これらのいずれか，あるいは，組み合わせ）
「行為・活動」+「移動・変化」+「状態」

「しよる」の「直前」を表す用法や,「しとる」に「過程」と「結果」を表す用法が存在することを説明するためには，下に示すように事象の推移も言語の用法に影響を与えると考え,「境界」も動詞が表す意味表示に加える必要があることを磯野（2018）では示した。これまで多くの研究で指摘されているように,「移動･変化」の事象から「状態」に移るときには1つの最高点（culmination）または推移（transition）があると指摘されている。また，ある活動・行為や移動・変化などが起こる直前にも推移に似た部分があると考えられている。このように,「境界」が意味に何らかの影響を与えていることは，これまでも多くの研究で受け入れられている。それを概略的に動詞の意味表示に組み込むと次のようになる。

（7）動詞が表す事象（これらのいずれか，あるいは，組み合わせ）
（境界）「行為・活動」+「移動・変化」（境界）

「状態」

ここでは,「行為・活動」と「移動・変化」を「+」でつないでいるが，この2つの事象は，順番で起こる場合だけでなく, 完全に重複して起こったり, または，一部重複して起こることもある。

このように動詞が表す事象を仮定すると,「しよる」と「しとる」の基本用法は，下にあるように下線部をそれぞれが意味的に取り立てている（強調している）と考えることができる。あわせて「している」の用法も示す。

（8）a. しよる：（境界）「行為・活動」+「移動・変化」（境界）「状態」
b. しとる：（境界）「行為・活動」+「移動・変化」（境界）「状態」
c. している：（境界）「行為・活動」+「移動・変化」（境界）「状態」

## 3 「しよる」の「直前」用法と動詞の意味表示

### 3.1 瞬間的な出来事を表す動詞

本節では,「しよる」の「直前」の解釈がどのように可能になるかを動詞が表す事象構造（意味構造）で考察する。まず,「しよる」が他の用法とあまり曖昧にならずに「直前」の解釈で用いられるのは瞬間的な出来事を表す動詞の場合である。

（9）a. 財布が机から落ちよるよ。（今にも落ちそうだよ。）
b. 階段から落ちよった。（あやうく落ちるところだった。）
（10）a. 東京駅に着きよる。（まもなく着く。）
b. 宿題するのを忘れよった。（あやうく忘れるところだった。）

このように，財布は実際には落ちていないし，東京駅にこれから着くなど，現在形（または未来形）の場合にはこれからまさにその事態が起こることを表し，過去形の場合には，もう少しでその事態が起こるところだったが起こらなかった，ということを表す。用いられている「落ちる」「着く」「忘れる」は，瞬間的な移動や瞬間的な内的変化を表すという点で,「瞬時的」な事象を表す動詞である。

これらが瞬時的な動詞であることは，次のようにいわゆる活動動詞が「10分間」と共起することである活動を継続したことが表せるのに対して，上の動詞が継続的な活動を表せず，結果の状態の継続しか表せないことからわかる。

（11）a. 10分間走った。
b. 10分間読んだ。
（12）a. 1枚のチラシが床に10分間落ちた。
b. 東京駅に10分間着いた。
c. 宿題のことを10分間忘れた。

「10分間落ちた」「10分間着いた」などは基本的には不自然な表現であり，解釈を強制的にするとすれば，チラシが床に落ちている状態が10分間続いたという解釈や東京駅に10分間止まっていたという解釈になる。

これらの瞬時的な動詞が表す事象構造（意味表示）を示すと次のようになる。

（13）a.「移動・変化」$_{\text{Inst}}$（境界）「状態」
b. [x BECOME [x BE AT y]]
c.

$$\begin{bmatrix} \text{event structure} = \text{RESTR} = [e1 <_{\infty} e2] \\ \text{qualia structure} = \\ \begin{bmatrix} \text{AGENTIVE} = \textbf{move}(e1, x) \\ \qquad\qquad [\text{CONST} = \bullet \quad \bullet] \\ \text{FORMAL} = \textbf{be-at}(e2, x, y) \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

(a) の概略的な表記では,「落ちる」や「着く」の移動は瞬間的であるため,「移動・変化」$_{\text{Inst}}$ のように Inst（instantaneous）で「移動・変化」を表す事象が瞬時的であることを表している。「移動・変化」の事象が瞬時的であり，その後,「状態」を表す事象へと境界を経て移行する。

上記の（b）は語彙概念構造（lexical conceptual structure）の意味表記で用いられる表示で，「財布が床に落ちる」を表記すると次のようになる。

（14）［財布 BECOME$_{落下}$［財布 BE AT 床］］

BECOME は基本的に瞬時的な移動や変化を表し，ここでの表記は，概略，「財布が瞬時的に移動し，その結果，床の上にある」といった内容を表してる。

上記（c）の意味表示は，生成語彙論（generative lexicon）で採用される表記で，「財布が床に落ちる」は次のように表記される。

（15）

$$\begin{bmatrix} \text{event structure} = \text{RESTR} = [\text{e1} <_{\infty} \text{e2}] \\ \text{qualia structure} = \\ \begin{bmatrix} \text{AGENTIVE} = \textbf{move}(\text{e1, 財布}) \\ \qquad\qquad [\text{CONST} = \bullet \quad \bullet] \\ \text{FORMAL} = \textbf{be-at}(\text{e2, 財布, 床}) \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

事象構造（event structure）では，移動・変化（**move**）と状態（**be-at**）の 2 つの事象から成ることが示され，特質構造（qualia structure）では，それぞれの事象の詳細な性質が記述される。事象 1 にあたる移動･変化の事象 **move**（e1, 財布）は，その構成構造（constitute structure）で，ある位置または状態から別の位置または状態への 2 極的な移動・変化であることが示されている。ここの例では，財布のある場所からある場所への瞬時的な移動を表している。事象 2 にあたる状態の事象 **be-at**（e2, 財布, 床）は，財布が床にあることを表している。

このように考えると「しよる」が瞬時的な動詞とともに用いられる場合のいわゆる「直前」の解釈は，動詞の意味表示が生成語彙論の表示でいえば，次の構造を持っているときに得られると考えることができる。

（16）$\underline{\textbf{move}(\text{e1, x})[\text{CONST} = \bullet \quad \bullet]} <_{\infty}$ **be-at**（e2, x, y）

この表示の中で「しよる」は下線の部分を意味的に取り立てている。ここでは，**move**（e1, x）［CONST ＝ ●　●］で落ちるという瞬時的な移動が「しよる」によって意味的に取り立てられるものの，移動した物体が他の場所に存在することは取り立てていないため，起こりそうで起こらなかったという意味解釈が表される。

### 3.2　時間幅のある出来事を表す動詞

前節では，「しよる」が瞬時的な動詞と用いられた場合の「直前」の解釈を考えたが，実際には，「しよる」は継続的な活動を表す動詞と用いられても「直前」の解釈を表すことがある。

（17）a. ツヨシが走りよった。
　　b. ツヨシがもうちょっとで／あやうく走りよった。

上の（a）は，ツヨシが走っていたという動作の継続の解釈が普通である。しかし，（b）のように「もうちょっとで」「あやうく」を加えると，もう少しで走り始めるところだったという解釈，つまり，「直前」の解釈が可能になる。継続的な活動を表す動詞は，普通は，次のような意味表示を持っていると考えられている。

（18）a.「行為・活動」+「移動・変化」
　　b. ［ x ACT ］CAUSE ［ x MOVE］
　　c.

$$\begin{bmatrix} \text{event structure} = \text{RESTR} = \text{e1 o}_{\infty} \text{e2} \\ \text{qualia structure} = \\ \begin{bmatrix} \text{AGENTIVE} = \textbf{act}(\text{e1, x}) \\ \qquad\qquad \textbf{move}(\text{e2, x}) \\ \qquad\qquad [\text{CONST} = \bullet \text{--->>}] \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

第 2 節で述べたように磯野（2018）で，「直前」の解釈を説明するために（境界）という事象を加えることを提案した。その表示を語彙概念構造や生成語彙論の表示にも適用すると，次のような表示を仮定することができる。

（19）a.（境界）「行為・活動」+「移動・変化」

b.［BECOME［ x ACT ］CAUSE［ x MOVE］］

c. ⎡event structure ＝ RESTR ＝ e1<$_{\infty}$e2 o$_{\infty}$e3
⎢qualia structure ＝
⎢⎡AGENTIVE＝**move**（e1, e2+e3）［CONST＝●　●］
⎢⎢**act**（e2, x）
⎢⎢**move**（e3, x）［CONST＝●------>>］⎤⎤⎦

（a）では，最初の境界の直後に「歩く」という活動が始まるということが表示されている。（b）と（c）では，それぞれ，BECOME と事象 1（e1）の **move** の事象が，「歩く」という活動が無かった状態から存在する状態へと変化させること，つまり，歩くという活動の開始を表す。ここでの「しよる」は，これらの（境界），BECOME，**move**（e1, e2+e3）を意味的に取り立てていると考えることで，「直前」の解釈が得られると考えることができる。

「走りよった」の「過程」の解釈は，上の意味表示の「行為・活動」，［ x ACT ］，**act**（e2, x）の部分を意味的に取り立てていると考えることができる。

以上のように「しよる」の「直前」の解釈は，意味表示に（境界）や **move**（e1, x）［CONST ＝ ●　●］を仮定することで説明できることを示した。

### 3.3　活動動詞の場合と瞬時的動詞の場合との曖昧性

次のような例では，「しよる」が「過程」の意味を表しているのか「直前」の意味を表しているのか曖昧である。

（20）a. 瑠花ちゃんがシートベルトをはずしよる。

b. 北海道に行く飛行機が離陸しよる。

普通には，「はずす」も「離陸する」も瞬時的な出来事を表すと考えることができる。しかし，シートベルトをはずすためには手を伸ばして留め具の部分を手に取り，そして，ボタンなどを押してベルトをはずす，という一連の作業があり，それを思い浮かべた場合には，ある程度，時間の経過を伴う「達成動詞」としての解釈をもつことになる。「離陸する」も同様で，飛行機の車輪が地面から離れるという瞬時的な場面だけでなく，飛行機が滑走路を走り始め，加速して，前輪が浮き，そして機体全体が地面から離れ，上昇していく，という一連の場面を「離陸する」という解釈だと考えると，やはり，時間幅を伴う「達成動詞」としての解釈になる。

このような例では，「はずす」が瞬時的だと考えると，「シートベルトをはずしよった」は「直前」の解釈で捉えることが可能となり，時間幅を伴っていると考えるときには，「過程」の解釈で捉えることが可能となる。それぞれの意味表示を生成語彙論の表示で考えると次のようになる。（a）は瞬時的な場合でこの場合には「直前」の解釈に，（b）は時間幅を有する場合でこの際には「過程」の解釈となる[2)]。

（21）a. **move**（e1, e2+e3+e4）［CONST ＝ ●　●］<$_{\infty}$ <u>**act**（e2, x）o$_{\infty}$ **move**（e3, y, z）［CONST ＝ ●　●］</u> <$_{\infty}$ **be-at**（e4, y, z）

b. **move**（e1, e2+e3+e4）［CONST ＝ ●　●］<$_{\infty}$ <u>**act**（e2, x）o$_{\infty}$ **move**（e3, y, z）［CONST ＝ ● ---------->>］</u> <$_{\infty}$ **be-at**（e4, y, z）

このように，動詞自体が瞬時的な解釈を許す場合と時間幅のある解釈を許す場合があるが，その場合でも上記のような意味表示を仮定することで，「しよる」の意味解釈を正しく捉えることができる。

## 4　「しとる」の解釈と動詞の意味表示

次に「しとる」の解釈について，簡単に見るこ

とにする。次の（a）は「待つ」が継続的な意味を持つため「過程」の解釈，（b）は「着く」が瞬時的な意味のため「結果」の解釈，（c）は「家が建つ」という出来事が時間幅を持ち，また「家が建った」という結果の解釈も持つため「過程」と「結果」の解釈が可能である。

（22）a. 友達を待っとる。
b. 電車が東京駅に着いとる。
c. 大きな家が建っとる。

「しとる」は先に見たように，概略的な動詞の意味表示で，下線部を取り立てると考えられる。

（23）しとる：（境界）「行為・活動」+「移動・変化」（境界）「状態」

「行為・活動」+「移動・変化」の部分を意味的に取り立てていれば「過程」の解釈に，「状態」の部分を取り立てていれば「結果」の解釈になる。上のそれぞれの動詞の意味表示を生成語彙論の表示で考えると次のようになる。

（24）a.「待つ」
event structure ＝
RESTR ＝ e1<∝e2
qualia structure ＝
AGENTIVE ＝
**move**（e1, e2）
［CONST ＝●　●］
**act**（e2, x）

b.「着く」
event structure ＝
RESTR ＝［e1<∝e2<∝e3］
qualia structure ＝
AGENTIVE ＝
**move**（e1, e2+e3）
［CONST ＝●　●］
**move**（e2, x）
［CONST ＝●　●］
FORMAL ＝ **be-at**（e4, x, y）

c.「建つ」
event structure ＝
RESTR ＝［e1<∝e2 o∝e3<∝e4］
qualia structure ＝
AGENTIVE ＝
**move**（e1, e2+e3+e4）
［CONST ＝●　●］
**move**（e2, y）
［CONST ＝●---->>］
**move**（e3, y）
［CONST ＝●　●］
FORMAL ＝ **be-at**（e4, y, z）

ここで事象 1，つまり **move**（e1）は，それぞれの事象の始まりを表している。それぞれの下線部が「しとる」が意味的に取り立てている部分である。（a）の「待つ」の表示では，**act**（e2, x）は待つという継続的な活動を表し，ここを取り立てているために「過程」の意味を表す。（b）の「着く」では **be-at**（e2, x, y）は駅に着いて止まっている状態を表すため，駅に止まっているという「結果」を表す。（c）の「建つ」の **move**（e2, y）は家が少しずつ出来上がっていくという時間幅のある状態変化を表すため「過程」の解釈となり，**be-at**（e4, y, z）は家が出来上がって建っている状態を表すため，「結果」の解釈となる。

「待つ」と「建つ」については，「しよる」が一緒に使われて「過程」の解釈を持つこともできる。

（25）a. 友達を待ちよる。
b. 大きな家が建ちよる。

これらの場合は，上の意味表示で「待つ」の **act**（e2, x）の事象や「建つ」の **move**（e2, y）［CONST ＝ ● -------->>］の事象を「しよる」が取り立ててこの解釈が生じると考えることができる。

## 5 「しよる」と「しとる」が表す意味と英語の進行形

### 5.1 「しよる」と「しとる」

これまで見てきたことをまとめると「しよる」「しとる」の動詞の意味との関わりの中でそれぞれの意味を捉えることができる。

「しよる」はこれまで見てきたように，生成語彙論の表示の中で，状態を表す **be-at** 以外の事象を取り立てることができる。つまり，何らかの活動や移動・変化が起こっていることを意味的に取り立てている。そしてその事象が時間的に幅がある場合には「過程」の解釈になり，瞬時的な場合，すなわち［CONST ＝ ●　●］がある場合には「直前」の解釈になる。

これに対して，「しとる」は［CONST ＝ ●　●］を持つ事象の直後に続く事象を取り立てることができる。その取り立てた事象が **act** や **move** のような活動や移動・変化を表す事象なら「過程」の解釈となり，状態を表す **be-at** なら「結果」の解釈になる。「しとる」の由来は「て居る」であり，完了をあらわす「て」に続く事象の継続を表すと考えられる。［CONST ＝ ●　●］は 2 極的な移動・変化を表すためこれを持つ事象は，ある事象から他の事象への推移を表すと考えられ，いわば「境界」を表す。この事象に後続する事象を「しとる」が意味的に取り立てるのはある意味，当然のことと考えられる。「しとる」は「している」と同じ由来であることから，最初に見たように「しとる」と「している」が動詞の意味表示の同じ部分を意味的に取り立てるのも当然のことといえる。

### 5.2 英語の進行形と動詞の意味表示

英語の進行形も，「しよる」と同じようにある活動が継続していることを表すいわゆる「過程」の解釈の他に，近い未来を表す用法を持っている。

（26）a. We are arriving at Tokyo Station.（東京駅に着こうとしている。）
　　b. He is leaving Japan.（彼は日本を離れようとしている。）

意味表示で考えると，進行形は時間幅のある事象を取り立てるときは「過程」の解釈になるが，上にある arrive（着く）や leave（離れる）といった瞬時的な動詞の場合には，「しよる」と同じように「直前」の解釈になると考えることができる。英語の進行形は「している」ではなく「しよる」に似た振る舞いをする。

英語の進行形の意味解釈と用いられる動詞の意味の詳細な関係の分析は，今後の課題である。

## 6 結び

本稿では，「しよる」「しとる」の用法をもとに，動詞の意味表示に事象から事象への推移を表す「境界」を導入し，主に生成語彙論の枠組みで用いられる動詞の意味表示で，「しよる」「しとる」と動詞の意味表示の関係を明らかにした。「しよる」は状態を表す **be-at** 以外の事象を意味的に取り立て，「しとる」は［CONST ＝ ●　●］を持つ事象の直後に続く事象を取り立て，取り立てる事象の **move** や **be-at** といった関数の違いで「過程」「結果」の解釈が得られることを捉えられることを示した。英語の進行形の意味解釈についても「しよる」と同じ意味表示で捉えることができると思われるが，詳細な分析は今後の課題とする。

**註**

1）本研究の一部は，JSPS 科研費 JP26370572，JP16K02934，及び，成城大学特別研究助成の助成を受けている。

2）ただし，後者の場合でも，実際にはずれる瞬間まで行為が続かなければ，「直前」の解釈になると考えることもできる。

**主要参考文献**

磯野達也（2016）「動詞のアスペクトと瞬時性について　―スケール構造を導入した語彙の意味表示の一考察―」『社会イノベーション研究』11.2: 135-148　成城大学社会イノベーション学会

磯野達也（2018）日本語の動詞と語彙アスペクト　―岡山県津山方言の「しよる」「しとる」の用法調査中間報告―」『社会イノベーション研究』13.1: 19-36　成城大学社会イノベーション学会

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト

—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房.
工藤真由美（2002）「現象と本質　—方言の文法と標準語の文法—」『日本語文法』2.2: 46-61　日本語文法学会
工藤真由美（2004）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系　—標準語研究を越えて—』ひつじ書房.
工藤真由美（2006）「日本語のさまざまなアスペクト体系が提起するもの」『日本語文法』6.2: 3-19　日本語文法学会
田中江扶・本田謙介・畠山雄二（2018）『時制と相』 朝倉書店
中島平三（2019）『「育てる」教育から「育つ」教育へ—学校英文法から考える』 大修館書店
日本語記述文法研究会（2007）『現代日本語文法　3』 くろしお出版
宮島達夫（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版